

## 第3章 京都大学本部構内B A22区の発掘調査

富井 眞

### 1 調査の概要

調査地点は京都大学本部構内の西北隅に位置している（図版1-321）。ここに百万遍門歩行者通路の敷設が計画されたため、発掘調査を2006年1月10日～2月3日に実施した。調査面積は総計で98㎡である。

吉田本町遺跡に含まれる本調査区の周辺では、これまでにほとんど発掘調査が実施されていないが、南方に位置する60・272地点では、弥生時代前期末の土石流堆積層である黄色砂が、中世頃の高野川の氾濫により側方浸食を受けていることが確認されており、本調査区での古代までの遺構の存在は、ほとんど期待されなかった。その一方で、中世以降の活動として、古地図の研究から、幕末に尾張藩屋敷が現在の本部構内におかれていたことがわかっており、尾張藩邸西北部の様相の解明が期待された。

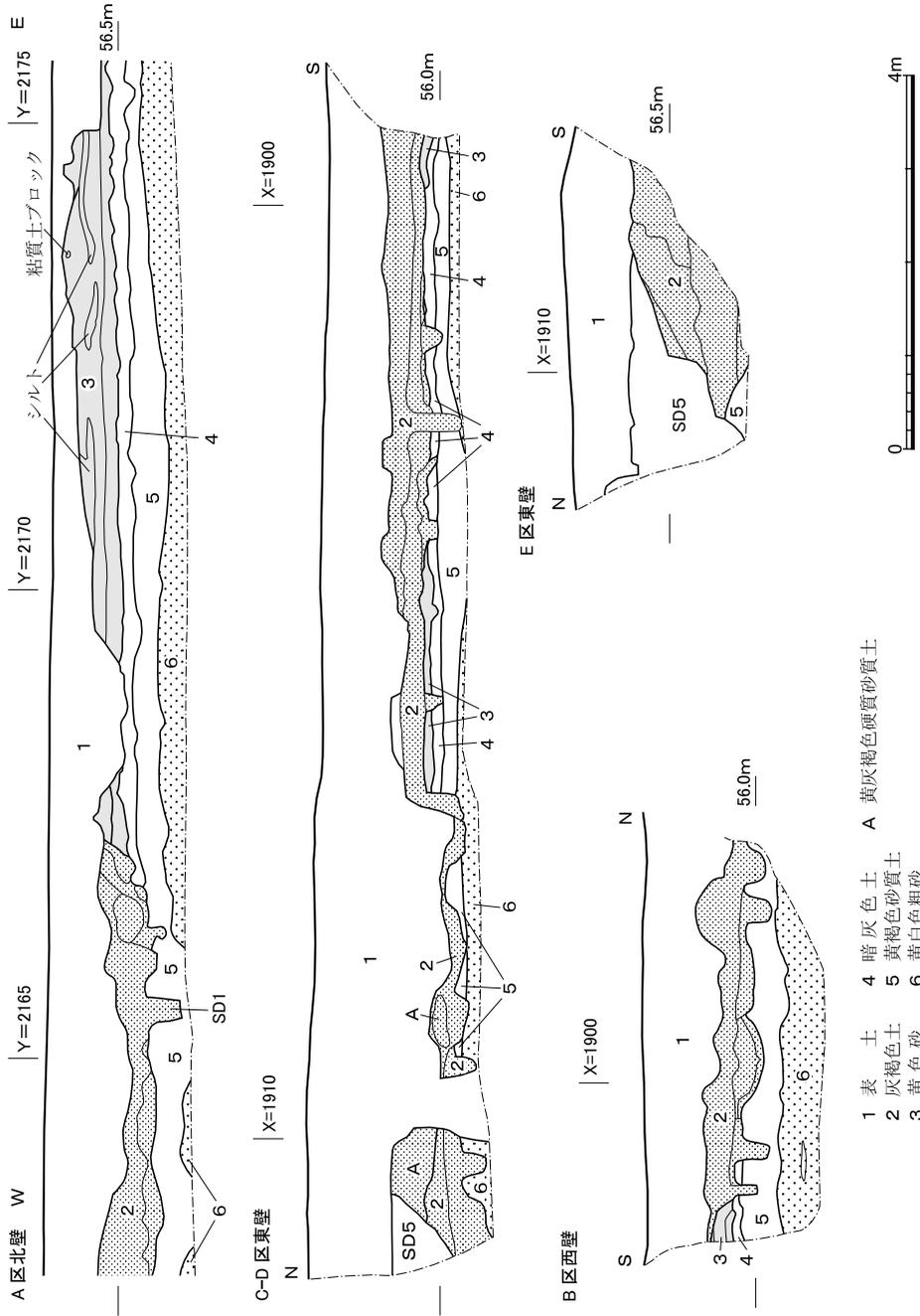
本調査に先行しておこなった試掘調査（後述するA区の東南辺付近およびB区）では、近世の遺物包含層に上部を削平された黄色砂の直下に、弥生前期末の旧地表面が残存している部分があることを確認した。そこで、近世だけでなく先史時代以後の遺構の存在も想定し得たため、5箇所の調査区を設定して調査をおこなった。

発掘調査の結果、近世の溝や畑境の段差と杭群、弥生前期末の旧地表面を検出した。遺物は、縄文時代から近代におよぶが、整理箱5箱を数えるにとどまった。

### 2 層 位

5つの調査区の基本層序は（図8）、表土（第1層）、灰褐色土（第2層）、黄色砂（第3層）、暗灰色土（第4層）、黄褐色砂質土（第5層）、黄白色粗砂（第6層）となる。A区では、中央から東半にかけては表土下に黄色砂を認めるが、西辺では近世の遺物包含層である灰褐色土が黄色砂と下位の暗灰色土を削平するかたちで厚く堆積している。

灰褐色土は、厚いところで50cmを越え、19世紀の遺物を含む。全体的に礫や砂を多く含み、主に畑として機能していたと想定する。A区西半とB区でのみ、灰褐色土を上下に二分し得たが、A区東半やD区では平面発掘時には分離できなかった。C区やE区など本調査区北辺では、灰褐色土の上部は黄灰褐色を呈する硬質砂質土（図8-A）がブロック状



## 遺 構

に含まれるが、遺物をほとんど含まないので、その年代は19世紀以降としか特定できない。

黄色砂は、比較的良く残存しているA区では上方粗粒化を確認できた。暗灰色土と接する最下部から約10cmの厚みでシルトが堆積する。その上部には、細砂が20～50cm堆積するが、その中には、シルトを介在させる場合もあれば、5cm前後の灰褐色粘質土のブロックを含む部分もある(図版5-2)。Y=2175付近では、細砂の上位に粗砂が約20cm厚で残存している部分がある。黄色砂と暗灰色土の層界面には、構内の多くの地点と同様に、無数の生痕化石を確認できる。

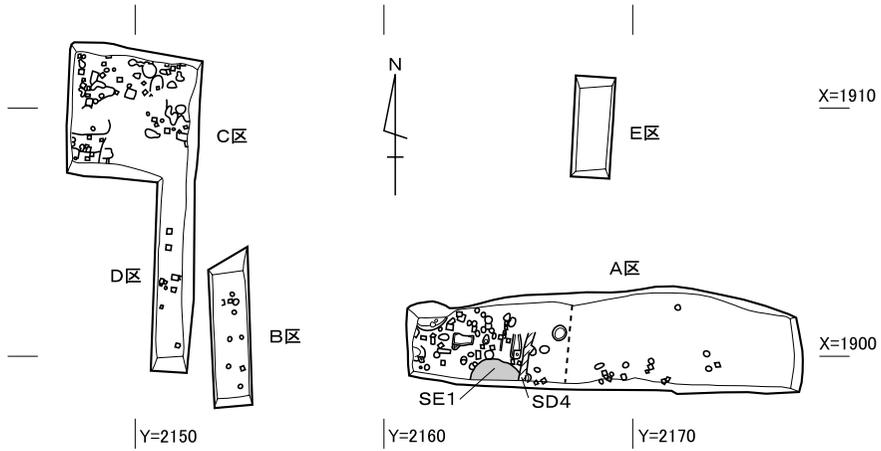
上面が弥生時代前期末の旧地表面となる暗灰色土は(図版5-3)、北辺には分布しないが、A・B・D区など、南半には確実に分布している。縄文時代晩期後半の二条突帯文土器である滋賀里Vなど、縄文晩期を中心に細片で150点以上の縄文土器が出土しているが、弥生時代の遺物は認められなかった。暗灰色土の下位の黄褐色砂質土は、調査区全域に分布する。暗灰色土から漸次的に移行する、あまり土壌化が進んでいない地層である。出土遺物は10点に満たないが、突帯文土器と特定できる破片は含まれない。ケズリ調整の胴部片が出土しているので晩期の堆積層と判断し得る。

黄白色粗砂は、ラミナが認められたり、層中にシルトや細砂などのレンズ状堆積が挟まれる部分もあるので、基本的に水成堆積を維持していると判断できる。遺物は発見できなかった。C区南辺で断ち割りをおこなって、ここでは、黄白色粗砂の厚みは約130cmであること、その下位には厚さ約100cmでやや黄色みがかかった灰褐色シルトが堆積していること、そしてさらにその下位には、拳大のチャートをはじめとして頁岩や花崗岩を含む褐色礫層が厚さ20cm以上堆積していること、以上を確認した。いずれも水成堆積と判断し得る。最下の礫層は高野川系だろう。

### 3 遺 構

A区とB区では、近世の遺構面を2面確認できたので、それぞれ、上位遺構面、下位遺構面と呼ぶ(図9)。下位遺構面では、両区でピット群を検出したほか、A区では、上位遺構面の段差に踏襲される南北方向の段差と、それにとまなう性格不明の円形の落ち込みSE1や南北方向の2条の溝などを検出した。遺物量はかなり限られているが、近世後半期の遺構と判断している。上位遺構面でも、両区でピット群を検出した。そのほか、A区では、南北方向の段差と、それにとまなう南北方向の2条の溝も検出した。いずれの遺構も出土遺物は数少ないが、明治よりは古い19世紀以降の遺構と判断している。A区の段差

近世下位面の遺構



近世上位面の遺構

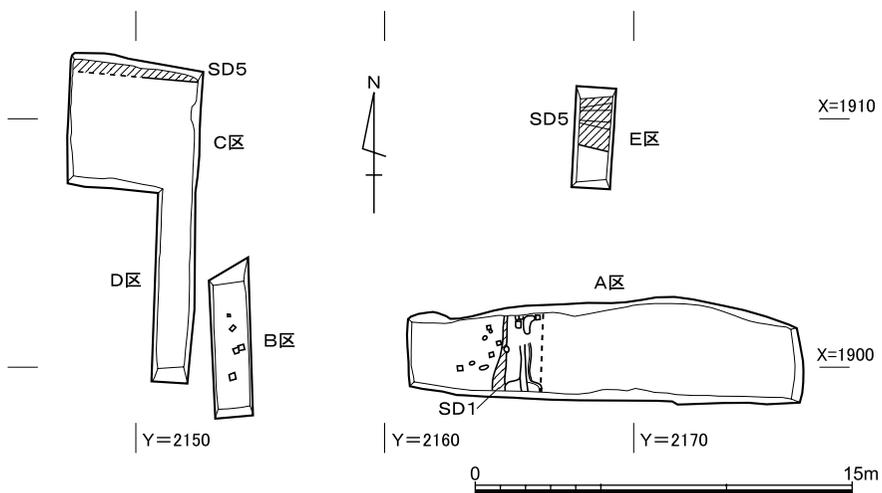


図9 近世の遺構 1/300

は、1800年頃までに作成された『山城国吉田村古図』に記されている「高畠」の小字内にある田畑の境の位置〔吉江2006〕とおよそ一致する。なお、A区東側のピット群は、どちらの遺構面に対応するかは判断できないので、便宜的に、下位遺構面の遺構平面図に示してある。

C区には、全域で検出したピット群や、西南辺の壁際で検出した棧瓦を含む小規模な近世後半期の瓦溜まりがある。A区のどちらの遺構面に対応するかは判断できないので、便

遺 構

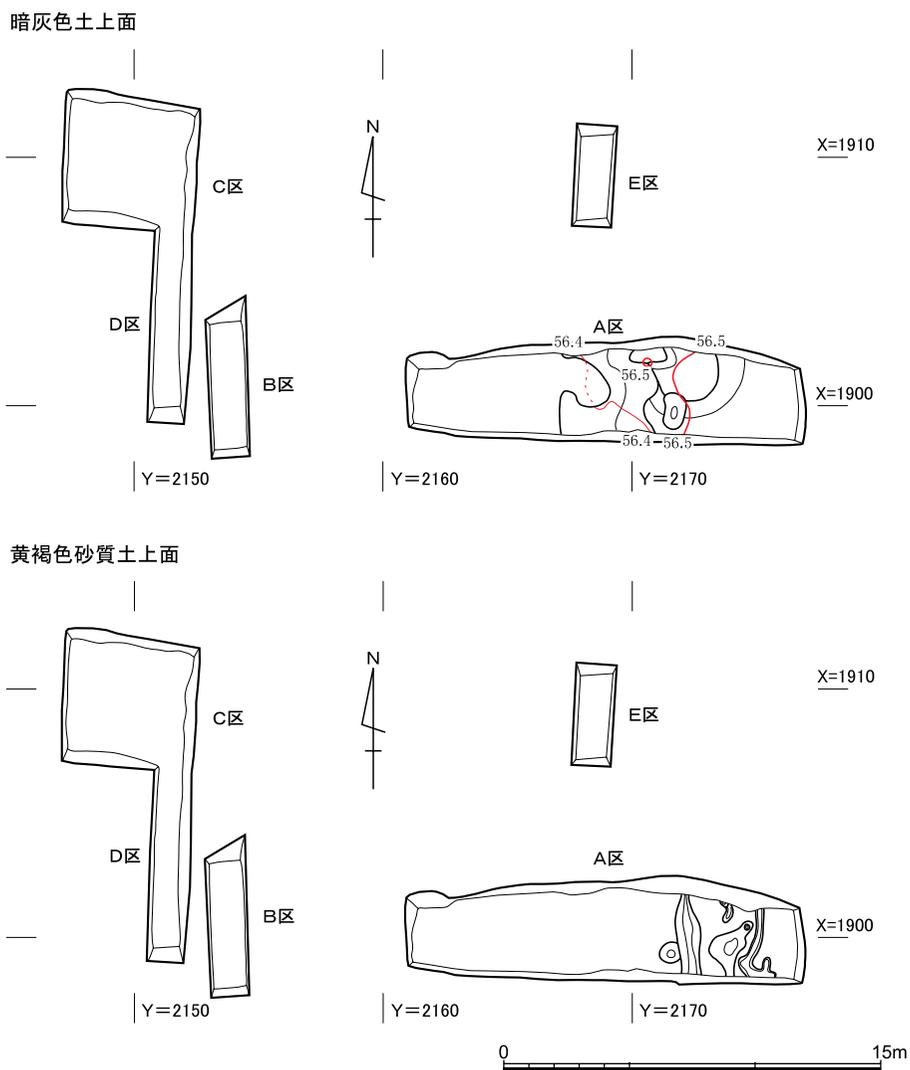


図10 先史時代の様相 1/300

宜的に、下位遺構面の遺構平面図に示している。

灰褐色土よりも上位の層準で検出した遺構として、C区とE区の北壁際で、北側へ大きく下がる落ち込みを検出した(図版5-5)。埋土は、灰褐色土上部の黄灰褐色砂質土ブロックよりは軟らかくて灰褐色土と同様の硬さで、色調も灰褐色を呈し、黄褐色砂質土(第5層)をブロック状に含む。現在の今出川通の標高よりも20cm以上落ち込んでいくことを確認できたので、大溝の南肩と想定している(SD5)。出土遺物量はきわめて限られてい

るので、19世紀以降としか判断できないが、レンガやガラスなどは確認できなかった。便宜的に、上位遺構面の遺構平面図に示した。

先史時代については、A区中央および東辺、B区、C区西南辺、そしてD区では、上面が弥生時代前期末の旧地表面となる暗灰色土の分布を確認した。(図10上)。A区とC・D区のそれぞれの断面観察によれば暗灰色土上面は、北および西にむかってかすかに傾斜する。暗灰色土上面では明確な遺構は確認できず、また、A区東辺には土器が散在しているけれども、A区中央や、それ以西のB区やD区では、遺物が出土しなかった。なお、暗灰色土の下位では溝状の窪みなどが確認できたが、人為的な遺構ではない(図10下)。

## 4 遺物

### (1) 縄文時代の遺物(図版6, 図11)

先史時代の遺物の中では、明確に弥生時代と特定できる遺物は見られず、細片を含めて180点あまり出土している縄文土器のなかでも、晩期の土器がほとんどである。石器は13点出土した。剥片石器は、両極打撃によるものも含めて剥片が7点、石鏃の製作を途中で断念したと思われる調整剥離のある剥片が4点、そして石鏃1点の合計12点を回収できた。いずれもサヌカイト製である。礫石器では敲石が1点出土している。

Ⅱ1～Ⅱ17・Ⅱ19～Ⅱ25は縄文土器で、Ⅱ18は敲石。Ⅱ1～Ⅱ18では、Ⅱ9が歴史時代のピットからの出土であるほかは、いずれも暗灰色土からの出土である。Ⅱ1は、中期末の深鉢胴部破片。Ⅱ2～Ⅱ4は無文深鉢の口縁部。いずれも内外面ともナデ調整。Ⅱ2は口唇部に面取りをおこなっていることから、後期後半のものと判断する。Ⅱ3・4は同一個体と思われる。これらも後期のものだろう。Ⅱ5は、巻貝条痕と思われる外面調整の胴部破片。後期後半かもしれない。Ⅱ6～Ⅱ17は晩期の土器。Ⅱ6～Ⅱ9は晩期後半の突帯文土器の口縁部。Ⅱ6は口唇部が尖らない。端部の整形は、3本指でそれぞれの指が口縁外面と口唇部と口縁内面に当たるようにして摘みながらおこなわれていると思われる。滋賀里Ⅳ式によく見られる特徴だが、口唇部の面取りは不明瞭。Ⅱ7～Ⅱ9は、口唇部が尖るか丸みを帯びるもので、2本指で摘みながら端部整形をしていると思われる。滋賀里Ⅴによく見られる特徴である。Ⅱ10～Ⅱ12は、ナデ調整が認められる口縁部から頸部にかけての破片。Ⅱ10はⅡ6と同一個体と思われる。Ⅱ11は、粘土帯を継いだ痕跡が良く残っている。Ⅱ12は、上半にナデ調整があり、下半はケズリ調整と思われるが、その境界の屈曲は甘い。Ⅱ11と同一個体と思われる。Ⅱ13～Ⅱ15は、滋賀里Ⅴの深鉢肩部の突帯部分。Ⅱ15

遺 物

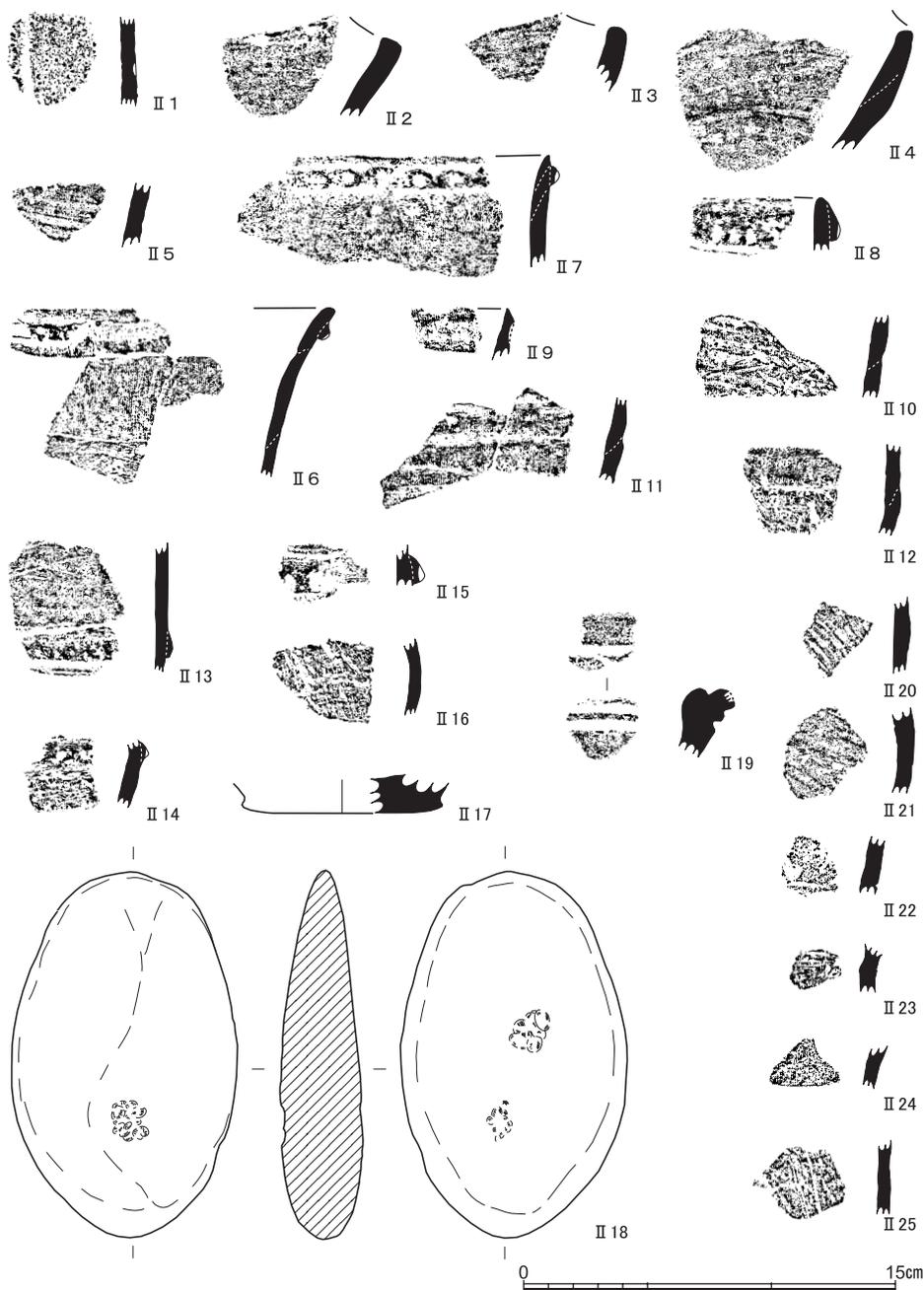


図11 先史時代の遺物 (II 1～II 8・II 10～II 18：暗灰色土出土，II 9：近世遺構出土，II 19～II 25：黄褐色砂質土出土) 縮尺1/3

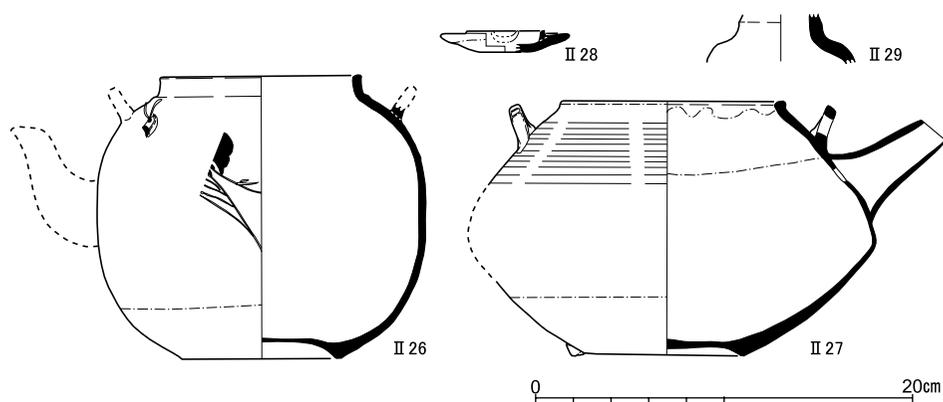


図12 歴史時代の遺物（II 26：S D 4 出土，II 27：S E 1 出土，II 28：S D 1 出土，II 29：S D 5 出土）

は、II 8 と突帯の形状や刻みが類似しており、同一個体と判断する。II 16の胴部破片は、ケズリ調整の上に煤が付着している。II 17は、突帯文土器の平底の底部。II 18は花崗斑岩製の敲石で、重量は489 gをはかる。

II 19～II 25は黄褐色砂質土から出土した縄文土器。II 19は、福田K 2 式の口縁部。口縁上面には、口唇部側に縄文が施されているようである。II 20は、巻貝条痕と思われる外面調整の胴部破片で、後期後半と思われる。II 21～II 24の外面調整はナデ。II 23の上部は突帯の根元から割れているのかもしれない。II 25は外面ケズリ調整の胴部破片で、晩期に帰属すると判断する。II 30～II 33は石鏃製作を断念した調整剥片で、II 34は石鏃。

## (2) 近世の遺物 (図12)

全体的に出土量は少なく、一つの遺構から遺物がまとまって出土することもなかった。おもな遺構の出土遺物について以下に略説する。

**S D 4 出土遺物** II 26は陶器土瓶。白と黒の二色のイッチン掛けで鶴が描かれている。包含層中にも上位遺構面で検出したS D 2 にも破片が紛れていた。近世後半期のものと判断する。

**S E 1 出土遺物** II 27は陶器土瓶。全体にかなり歪んでいる。包含層中にも上位遺構面で検出したS D 1 にも破片が紛れていた。近世後半期のものと判断する。

**S D 1 出土遺物** II 28は陶器灯明受皿。S D 1 は19世紀の遺構と判断する。

**S D 5 出土遺物** II 29は青磁の壺のくびれ部分。S D 5 から出土したのはこの1点だが、S D 1 に切られる灰褐色土からは、近世後半の陶磁器や棧瓦の破片が出土している。

## 5 小 結

**先史時代の成果** 本調査区の約100m南南西に位置する60地点、および約200m南南西に位置する272地点では、黄色砂が後世の高野川の側方浸食によって削り去られていることが確認されていたので、本調査区では弥生時代の堆積層の残存が期待されなかった。しかし、予想に反して、北西にむかってかすかに傾斜する弥生前期末の旧地表面を確認できた。A区とC・D区のそれぞれの断面観察によれば暗灰色土上面は西にむかって緩やかに傾斜していると思われる点、その下位の黄褐色砂質土はC区北半でも近世の包含層の直下に確認されている点、以上の二点から、C区北半やE区にも黄色砂の堆積時には暗灰色土が広がっていたと考えられる。少なくとも本調査区内には、弥生前期の河道や流路は存在せず、下位の黄褐色砂質土が縄文晩期と思われる土器片を包含しているので、遅くとも縄文晩期からは、調査区一帯は弥生前期末まで白川も高野川もともに浸食を及ぼさない安定した環境にあったことがわかる。もっとも、縄文晩期の土器が狭い調査面積ながらも比較的多く出土している一方で、土器の出土していない弥生時代については、活動が低調だったと言えよう。

北部構内西南辺の297地点北西部では、北北東から南南西に向かう弥生前期末の流路の東肩を確認しており、また、109・320・297・276・208・52・265地点には、弥生前期末の土石流堆積物である黄色砂中に巨礫を確認できている。さらに、218地点では、黄色砂に覆われる西へ大きく傾斜する旧地形が確認できている。今回の調査では、60・272地点で残存が確認された弥生前期末の旧地表と同様に、そうした特徴から推測し得る弥生前期末の北東方面からの流路の西限を特定するのに役立つ。すなわち、かすかとはいえ本調査区の旧地表面は北西方向に傾斜している点は重要である。本調査区の東側に南西方向に張り出す地形の存在が想定できるからである。北部構内西南辺を流れ下ってきた流路が、218地点をその左岸とするようにして本調査区よりも東を進み、その右岸を形成した斜面の尾根を挟んで反対側の緩斜面が本調査区だった、と考えられるのである〔富井2003〕。つまり、本調査区は、弥生前期末には、東を流れるその流路と西の高野川とに挟まれて、中洲状に取り残されていた微高地だった可能性が高い。本調査区での弥生時代の活動が低調だった背景もここにあると思われる。

その一方で、晩期後半の突帯文土器が比較的高密度で出土していることは、縄文時代にはまだ、本調査区の東を流れる流路は、存在しなかったことを想定させる。もちろん、既

に窪地になっていた可能性はあるものの、いつも水が流れるような状態ではなかったのかもしれない。

弥生前期末の土石流堆積物である黄色砂の、上部の細砂で構成される部分には、シルトの堆積をレンズ状に確認できる。そうしたシルト部は、旧地表直上のシルト層とはもちろん連続しない。また、そうした細砂の上部、レンズ状のシルト部よりも上位に、粒径5 cmほどの礫状の灰褐色粘質土ブロックを1点確認できた(図版5-2)。上流で削り去られた旧地表と考えられる。こうしたことから、土石流には少なくとも二波があったことが、上流部の北部構内だけでなく〔富井2008〕、さらに下流のこの地点でもうかがえた。

**歴史時代の成果** 当初に成果が期待された、幕末の尾張藩邸に関する良好なデータの取得はかなわなかった。C区北端およびE区北端で確認できたSD5は、層位的には、近世の遺物包含層である灰褐色土の上位から切り込んでいる。75・89地点で確認された藩邸東南隅の堀や、277地点で確認された藩邸西辺南部の堀も、近世の遺物包含層の上位で表土ないし近代の地層よりは下位の地層から切り込んだものであるが、296地点では、藩邸に伴う遺構は、近世の遺物包含層と思われる灰褐色土中から切り込んでいる。本調査区は、灰褐色土の掘削中に認めた近世の二つの遺構面で、西落ちの段差やそれに平行する溝が検出されているから、遅くとも近世後半には段々畑となっていたことがわかる。すなわち、灰褐色土堆積中に藩邸が営まれていたとは考えがたく、上位遺構面は、尾張藩邸の営まれ始めた文久2年(1862)よりは古いと考えるのが妥当だろう。それよりも層位的に上位であるSD5は、その点では藩邸の時期とも考え得る。しかし、出土遺物がほとんどなく、また、北へ下がることは確かだがそれが堀だとしても規模は定かではない。さらには、現在の大学敷地の区画の北壁ラインとおよそ並行している。むしろ、近年の想定にならえば〔伊藤・梶原2007〕、本調査区は、藩邸の敷地内であって藩邸北限に位置してはいない可能性は十分にあり、SD5は、第三高等学校ないし京都帝国大学の造成に関わる近代以降の遺構と解釈するべきだろう。以上から、SD5を藩邸北限の堀と決定づけることには躊躇される。

発掘調査および整理調査は、吉江崇と富井眞が担当し、磯谷敦子・柴垣理恵子・下坂澄子・長尾玲・和田晃・役重文範が測量・実測などの作業にあたった。また、暗灰色土上面の様相など地形や堆積状況に関して増田富士雄氏(同志社大学)より有益なご教示を賜りました。末尾ながら、記して感謝申し上げます。